

クラシック不況 どう対抗

構造的要因を克服するには

ジャーナリスト（元浜離宮朝日ホール支配人）志村嘉一郎

いま、音楽ホールでは入場料の値下げ競争が続いている。クラシック音楽ファンの財布のひもが固くなり、値下げしないとホールの座席が埋まらないからだ。これでは、オーケストラやソリストなど出演者のギャラも下げるを得ず、コンサートを企画する音楽プロデューサーの手数料も下がり、死活問題となってくる。公演予算が少なくなれば、コンサートの質も落とさざるをえない。JASRAC の高い著作権料を回避するためには著作権の切れた曲を選ぶことになり、現代曲などは演奏できない。新進作曲家の養成もままならなくなってる。どこまで悪循環が続くのか。

大震災に増税追い打ち

2000 年代は、入場料が 7000 円、6000 円でも音楽ホールは満員になった。が、最近では 5000 円以下でもなかなかホールは埋まらない。高い入場料で客足が遠のくようになってきたのは、2010 年代になってから。最初の契機は 2011 年の東日本大震災だった。多数の死者が出て津波や地震で被災した地域が深刻となり、全国的にイベントの自粛ムードが広がった。このムードが音楽ファンにもおよんで数年続いた。その後も、音楽ホールの客足はなかなかもどらなかった。これに、2014 年の消費税増税が追い打ちをかける。5 % から 8 % に引き上げられ、チケット代にも増税分を上乗せせざるを得なかった。自粛ムードと増税のダブルパンチで、音楽ホール不況は 5 年以上も続き、定着してしまったのである。

小泉改革とアベノミクス

もっと構造的な背景があるのではないか。小泉内閣の構造改革からアベノミクスにつながる日本経済の変革により、個人の収入格差が拡大してきたことが、クラシック不況につながっているのでは。小泉構造改革はニューエコノミーを標榜、多数の熟練労働者を求める社会から、少数の創造的な社員と多数の単純作業を求める社会へと変化させ、多数の非正規社員を生んだ。派遣社員、契約社員、パート、アルバイトなど非正規雇用者は、2001 年に 27 % だったが近年は 38 % まで増えた。賃金格差は 2016 年の統計

では、正規に比べ非正規の収入は 66 % と少ない。その上、非正規は国民年金や健康保険も自分持ちが多く、実質的格差はさらに拡大する。文化や芸術に使う余裕などないのである。

ファン動員 あの手この手

ここ 1、2 年、安倍内閣は、労働力不足と賃金上昇を盛んに宣伝するが、実態は宅配便やコンビニなどで過酷に働いてきた人たちの賃金や労働時間を調整する動きで、非正規社員が格段に減っているわけではない。企業は収益をどのくらい労働者に払っているかがわかる労働分配率は、2012 年に 60.5 % だったが 26 年には 53.7 % に減っている。総体でみれば、従業員の収入は増えていないのだ。

クラシック不況の中で、ホール運営者や音楽プロデューサーは、いろいろと考えてファンを動員する手を打っている。たとえばハーフ券。コンサートの後半だけ聴けるチケットを 40 % から 50 % 引きで発売している。入場料が 4500 円なら 2300 円から 2700 円で後半だけ聴ける券だ。昼のコンサートも盛んだ。1000 円から 1500 円と安いが、これは年寄向け。年金生活者などは美術展の入場料と同じくらいでコンサートを楽しめる。連続券も流行している。全公演の割引率もこれまでより拡大し、1 回ごとに買うよりはるかに安くなっている。

しかし、これでは値下げ競争の域を出でていない。構造的な要因に立ち向かう必要があるだろう。アベノミクスの成功をじっと期待していても、ほんとうに経済がよくなるかどうかは、みんなが疑問をもつところである。2019 年の天皇譲位で、祝福景気が起こるかもしれない。だが、翌年の東京オリンピック・パラリンピックを頂点に我が国の景気が下降するのは間違いない。1964 年の前回五輪が実際に示しているとおりだ。

この難局を乗り切るには、関係者だけの力では限界がある。関係者が一丸となって打開策を考えて、政府や地方自治体も巻き込んで財政的支援も考えて、長い目で改善していく必要があるだろう。



私の仕事の経歴

充実した人生の源 民音コンサートをつくって30余年

元 民主音楽協会 こぶしくらぶ主宰 江藤昌子



私は財団法人民主音楽協会(現一般財団法人民主音楽協会／通称「民音」)の企画部門で30余年勤務して参りました。当時企画部門は「クラシック音楽・公益部門」と、「その他歌謡曲・ポピュラー・伝統芸能部門」の2つになっていました。中学、高校時代とアメリカのポピュラー音楽、特にエルビス・プレスリーなどのロックの大ファンでしたので、民音に入った時にはポピュラーの方だと思い、いろいろな仕事を夢見ていましたが、何と配属されたのは「クラシック部門」でしたので、何もわからず途方に暮れおりました。そんな時、音大出の先輩が「コンサートに行ったりレコードを聴いたり、ともかくクラシック音楽に触れる事が大事だとアドバイスをしてくれましたので、幸い民音には資料がたくさんあったこともあり、出社から退社まで資料を見たり聞いたりのクラシック音楽漬け、夜はコンサートに連日行きました。その内、すっかりクラシック音楽の虜になりましたし、かなり知識も豊富になり、どんなコンサートを提供するかを考えられるようになりました。

会員100万人 年間1500公演

当時の民音は会員が100万人いて、年間1500回の公演を行っており、その内の20%をクラシック音楽公演にする、という目標で、招聘と国内アーティストで300回のコンサートを行っていました。大都市では新進気概演奏家のコンサート『新進音楽家シリーズ』、日本を代表するヴィルトゥозのコンサート『名演奏家シリーズ』、各オーケストラが順番に登場する『民音定期演奏会』を行っていました。また、「オーケストラ音楽に接するチャンスの無かった会員さんにその楽しさを知ってもらいたい」とオーケストラを使って行う『リラックス・コンサート』や『ハピニング・コンサート』では、多彩なゲストを招いていろんなジャンルの曲目、バレエあり、オペラあり、交響曲の一つの楽章あり、ポピュラー音楽あり、歌謡曲あり、と多種多様な内容がエスカレート気味になりましたが、いつも完売の大成功の企画でした。当初のオーケストラファン、つまり『定期演奏会』の観客を増やす、という目標は達成されませんでしたので、段々に『定期演奏会』は衰退していきました。同じく当時コンクールの一つに、クラシック音楽の中で大事な部門である、という意味で『室内楽コンクール』を行っていましたが、公演でも室内楽のコンサートを行いましたが、なかなか聴衆が定まりませんでしたので、コンクールは5,6年で止めてしまいました。『室内楽シリーズ』という名前で横溝亮一、

長谷川武久両先生のお話を交えてのコンサートは10年続けました。続けて必ずきてくれていたお客様は「一つの学校を卒業したようだ」と言ってくれた時は、大変な充実感を感じました。

100万の会員は北は北海道から南は沖縄まで、全国に及んでいましたので、「あまりコンサートなど行われない地域でコンサートを行いたい」と思い、アーティストや音楽事務所のご協力を頂きながら、全国津々浦々「100回コンサート」と銘打った公演を行い、特に地方の会員からは大変喜ばれました。地域が遠方になると、会員より会員外の方が多くなり、回を重ねると皆さん会員になってくださる、という現象も出てきました。小都市では民音のコンサートを楽しみにしてくださる方も年々増えて来て、各地で定着するまでになりましたので、大きな社会貢献ができたのではないかと思っております。「平岡養一木琴人生」、「莊村清志×神崎愛・ギターとフルート」、「外山滋ヴァイオリンの音は森の音」(作り物)、「遠藤郁子ショパン名曲集」、「岡村喬生世界音楽の旅」、「安倍圭子マリンバ・コンサート」、「五十嵐喜芳・マリエ親子コンサート」などなど、親しみやすい楽しい内容で、大きな会場も無く人口の少ない都市でも行う事が出来、大変に喜ばれたことは、「民音らしいコンサートだった」と自負しております。

バレエは全国 オペラは大都市

舞踊公演は東京バレエ団、松山バレエ団を中心に、小松原庸子スペイン舞踊団を交代で毎年全国主要都市で平均30～40回、行ってきました。

バレエの演目はチャイコフスキーを始め、名作を中心に行なってきましたが、20周年になった頃に、日本で誰でも知っている「かぐや姫」を題材としたバレエを創作したく、文豪を父を持つ作曲家と話をしていました、振り付けにはある有名なアメリカ人振付家にアプローチしていましたが、作曲家が急逝されて実現には至りませんでした。本当に残念に思っています。

オペラ公演は大都市だけで行なう大掛かりな公演と、全国主要都市で行う2種類がありました。大都市公演で思い出深いのは、小澤征爾指揮、鈴木敬介演出で行ったオッフェンバック「ホフマン物語」と、小澤征爾指揮、栗國安彦演出、チャイコフスキー「スペードの女王」の2作品はあまり公演されない演目でもあり、いろいろありましたが、忘れられない公演となりました。小澤さんが海外で行う公演の「試演



公演」などと言う人もいましたが、いずれも感慨深い公演がありました。

忘れられない事件

違った意味で忘れられないのは、指揮にジャック・デラコートを招き、演出栗國安彦(肺がんで直後にお亡くなりになり、最後の演出となった)と松本重孝で、ヴェルディ「椿姫」の公演を行った時の事です。ヴィオレッタに佐藤しのぶ、アルフレードにロベルト・アラーニャ(=この時が初来日で、「アルフレード歌い」として有名になる)、ジェルモントにロベルト・フロンターリを招き、なかなかの公演内容でした。NHKが放送してくれて、その映像権利を取得してDVDを作成し販売しましたが、たくさん売れて「オペラ公演は成功すればこんなに儲かるものなのかな？」と驚きました。懐かしい思い出です。その制作の過程で違った意味の驚きと、今でも忘れられない「事件」ともいうべき事態が起こりました。

音楽リハからオーケストラ合わせ、と順調に進み、二人のロベルトも、指揮のデラコートの誘導の元、日本のグループとすっかり打ち解けて、「きっと良い公演になるな。」と期待が持たれる雰囲気でゲネラル・プローベを迎えましたが、1幕2幕と順調に終わり、最後の3幕目に入ったところで、突然オーケストラが止まってしまいました。ビックリしてオーケストラ・ピットを覗くと、メンバーが楽譜や楽器をしまい、帰り支度をしているのです。「どういうことですか？」とオーケストラに声を掛けると、「時間なので今日は終わりです。」との事…。「そんな契約はしていません！」と話しても、当の契約を交わしたオーケストラの事務局の人やステージマネージャーの人達は姿が見えず仕舞い。おそらくこの事態をわかっていて姿を見せないのだな、とは、後でわかりましたが、歌手も指揮者も「日本でこんな事が起るとは思わなかった」と驚いていました。アラーニャは「この東京文化会館の音響がわからないので、最後まで通させてくれないと、本番で歌えない」と泣きそうでした。指揮者と稽古ピアノ奏者が快くリハーサルの伴奏を引き受けてくれて、3幕までのプローベをなんとか終了でき、明くる日の本番は大成功に収める事ができました。しかしあの公演の事は、生涯忘れられません。一度のエクスキューズもなく終わって、あの時の人達は、以後も平然と音楽を生業として生きてきたのかな、と無情を感じます。

不可解なオーケストラの対応

当時労働組合活動が台頭して、ほかにも日本フィルが二つになった時も、我が社の年末の「第九」公演が犠牲になりましたが、この時は事務局から「一部の団員がボイコットする危険性がある」との連絡があったので、返金の準備をして

いたので、困った事には変わりはありませんが、混乱は少なかったのです。それから比べると、このオペラの時のオーケストラの対応は不可解で許せないものとして27年過ぎた今でも、心に残っています。

各地主要都市で行ってきた制作オペラは、基本的な考え方として公益部門の主要事業である「民音コンクール」のフォロー事業を意識して行いました。都市はまずオーケストラが活動している都市(九州、広島、大阪、名古屋、札幌)と、関東、神奈川は東京のオーケストラで行いました。指揮者は「民音指揮者コンクール」の入賞者を、ソリストには「民音声楽コンクール」の入賞者や入選者を中心に、合唱は二期会と藤原歌劇団にお世話になり、スタッフは「ザ・スタッフ」、特に田原進氏にお世話になりました。演目はモーツアルト「フィガロの結婚」が指揮手塚幸紀。ブッチーニ「蝶々夫人」が指揮尾高忠明。ロッシーニ「シンデレラ」は指揮がジエローム・カルタンバッカ。演出は全ての演目で栗國安彦で行い、各地のオペラファンには大変喜ばれました。また、当時の広報宣伝部門がマスコミ関係や諸先生方に念入りに宣伝をしてくれて、新聞の文化欄等で畠中先生、丹羽先生が「みんおんオペラ」と呼んで下さり、出来の良い時悪い時にも適切な批評をしてください、次への決意に繋がったことも感謝しています。

学校コンサートや国際交流も

公益部門は4ジャンルのコンクールを行いました。「指揮者コンクール」、「室内楽コンクール」、「声楽コンクール」、「振り付けコンクール」の4つですが、「振り付けコンクール」は定着せず、1度で終わってしまいました。

現代作曲音楽祭では、数十人の作曲家に曲を依頼し、発表のコンサートを約20年間行ったお祭りで、多額の資金が掛かりました。著作権はご本人に持たせた為、曲の後の消息はわかりませんが、時々コンサートで懐かしい曲名を見つけると、うれしい気持ちにはなります。

大きな行事の公益の他に、各地の学校コンサートや、海外のJMJ(青少年音楽連合)との国際交流コンサートなどを行ってきましたが、いずれもたくさんの思い出を作り、充実の人生の源となっております。

他に招聘部門のお話も聞いて頂きたいと思いますが、長くなりますので、またチャンスがありましたらよろしくお願いします。

2017年2月22日(水)

音楽プロデューサー協会例会にて

江藤昌子



私の仕事の経歴

名指揮者や名演奏家との出会い

ムラヴィンスキー、スター、カラヤン、ショルティ…

(株)日本アーティスト取締役会長 寺田有佑

チラシ見て新芸術家協会に

私は中央大学で法律を学びながら、大学のオーケストラではヴァイオラを弾いておりました。法律には興味を抱けないまま、最終学年の後半にはヨーロッパを旅行したりしておりました。帰国し卒業を間近にしたある日、行きつけのクラシック喫茶、「新宿らんぶる」で偶々当時の巨匠、ヴィルヘルム・ケンプのチラシを目に入りました。この時改めて、「こんな仕事もあった」と、早速招聘元の「新芸」に連絡し社長の面接を受けたところ「すぐ、明日からでも来てください」と言われました。流石に翌日から出勤は出来ませんでしたが、在学中から働き始める事となりました。1970年、会社は大きくなり始め、万博を控え多くの演奏会も予定されていました。

私が入社する前の歴史を少しお話しします。北大オーケストラでチェロを弾いていた西岡芳和社長は、卒業後、始め道内を中心に仕事をしていましたが、二期会が創立された1952年頃、東京での仕事は二期会に事務所を置き、労音などとも全国で活動するようになったようです。翌年に「新芸術家協会」という音楽事務所を創設。1954年、日比谷公会堂でのカラヤン=N響を聴けなかったのがきっかけで「ベルリン・フィルを呼びたい!」という気持ちになり、本格的に東京に出て活動しようと思ったとのこと。当時、神彰氏の「アート・フレンド・アソシエーション」という事務所がありましたが、所謂「音楽事務所」はまだまだ少ない時代です。1922年生まれの西岡社長が亡くなったのは2013年。夫人はバレリーナで、結婚を機に上京し本格的に活動を始めたと聞きました。

レニングラード・フィルを招く

入社した当時は、少し前に入られた田中さん、労音から来られた中筋さん、二期会から入社された吉田さん、3人が西岡社長の下で活躍していました。梶本事務所ではその頃はもう戸田さんの時代になっていましたね。

万博ではソ連から多くの演奏家が送り込まれ、なかには当時「幻のピアニスト」と呼ばれたリヒテルを読売新聞社等が招聘し、新芸が公演を組織しました。

会社も更に大きくなり1973年には、ムラヴィンスキー指揮レニングラード・フィルも招き、このコンビでの初来日を実現しました。東京文化会館での初日、背が一際高く、哲学者然とした趣のムラヴィンスキーが登場した瞬間、客席がどよめいたのを良く覚えています。又、56年ヒンデミット、59年カラヤン、69年ショルティの指揮で来日していたウィーン・フィルを、新芸は1973年4回目にして、

初来日のアバドの指揮で招聘しました。当時、ウィーン・フィルで後に楽団長となるヒューブナーがN響の客演奏者として在籍しており、西岡社長が彼と知り合った事でこの来日が実現したのです。

フィラデルフィア管に熱狂

更に記憶に残るのは、オーマンディ指揮フィラデルフィア管とアイザック・スターとの共演です。聴衆も熱狂した素晴らしい演奏会でしたが、後日「スターとオーマンディが大儲けして帰っていました」と酷い評を書いた、全く分かっていない評論家がいて、単にヨーロッパかぶれでアメリカからの物は全て良くないという先入観を持った人なのではと思い呆れましたね。

ほかにはショルティ指揮シカゴ響、ノイマン指揮チェコ・フィル、スヴェトラーノフ指揮ソヴィエト国立響、ボリショイオペラや、團伊玖磨「夕鶴」の国内巡回ツアー、ソリストでは、ケンブ、リヒテル、ギレリス、ベルマン、アラウ、グルダ、クライバーン、ポリーニ、ロストロポーヴィチ、フルニエ、オイストラフ、コーラン、スター、メニューイン、クレメルと枚挙にいとまがない錚々たるソリスト達と仕事をする機会を得ました。ポリーニは、ショパン・コンクール優勝後10年間演奏会を行わず勉強していたので、一般には殆ど知られていない存在でしたが、さすが日本のファンは良く知つておらず、演奏会も満員の盛況で熱気に溢れていました。

この業界の方なら少なからず経験しておられるように、すべての企画が実現したわけではありません。ズッカーマン、バレンボイムと、デュプレで企画していたピアノ・トリオは、デュプレが直前で病気になりデュオのコンサートとなってしまいました。デュプレの病気については、後に映画になりましたね。

ソ連三大バレエ団を交代で呼ぶ

招聘した歌手では、シュワルツコップ、ホッター、モナコ、それにフランク・コレッリなんて覚えてますか?コレッリの公演ではファンが舞台に殺到しました。更にテバルディ、フレーニ、バルツア、フィッシャー=ディースカウ、シュライヤー、ギャウロフ、凄いメンバーばかりでした。バレエではレニングラードバレエ団、ボリショイバレエ団、キエフバレエ団の3団体を毎年交代で呼んでいました。

日本人の演奏家は、海野義雄、堤剛、中村紘子氏のトリオ、江藤俊哉、園田高弘、岩城宏之、秋山和慶など、こちらも又錚々たる顔ぶれが所属していました。



ベルリン・フィル漸く決まる

1979年、西岡社長の長年の夢であったベルリン・フィル招聘が漸く決まりました。N響の理事長であった有馬大五郎が大学でカラヤンと同期だった縁でN響に招聘、その後西岡社長は有馬氏に仲介を依頼し、カラヤン指揮でベルリン・フィルを招聘出来る運びとなりました。五千人収容できる普門館で9回公演し、新宿駅からの臨時バスが出るほどの盛況で、交響曲の他に、ヴェルディ、モーツアルトの「レクイエム」、ハイドン「天地創造」等を演奏し大成功を収めました。

ところが、皮肉なことにこの時期から新芸は経済的に傾いてきました。当時急激な円安でドイツマルクも高騰、その影響で大きな赤字も抱え、他にも事情があり会社は少しづつ衰退していきました。

公演中止重なり倒産、退社

翌1980年、モスクワオリンピックが開催されました。皆さんご記憶のとおり、日本もボイコットをした影響でソ連からのアーティストのキャンセルが相次ぎ、多くの公演が中止となり、赤字は増える一方でした。この時代に売り上げは14億、赤字額は3億位でしたから、何とか立て直すことも出来たように思いますが、さらに追い打ちをかけたのがカール・リヒター指揮のミュンヘン・バッハ管弦楽団で、公演直前にリヒターが亡くなり、代演者ではチケットが全く売れなかったり、ムラヴィンスキイが病気になりレニングラード・フィルが来日不可となるなど、運の悪いことも重なりました。結局1981年には倒産することとなっていました。

私は当時制作部長として、ホテルや旅行社からの宿泊、旅行代金等の取立てに対応する中で、会社の財政状況も良く分かっていました。倒産する直前の1980年、徐々に社員達への待遇も悪くなり、私も残念ながら社長との考え方の相違が埋められず退社致しました。

日本アーティストを創立

かねてより海外のアーティストからも独立を勧められていたので、退社を機に、1981年に「日本アーティストマネジメント」を立ち上げました。社名はウィーン・フィルのヒューブナー会長が名付けてくれました。後に「日本アーティスト」と略しましたが、英文表記は当初から変わりません。

事務所は、東フィルの松木さんの紹介で、目黒の弦楽器輸入販売店「カンダカンパニー」の一部を借りてスタートしましたが、なんとその年に、突然「東京地検特捜部」が、ヅカヅカと我々の事務所に入ってきたという驚きの出来事がありました。新芸で海野さん達のトリオのマネジメントをしていたので、「何か関係があるだろう?」などと尋問されたことは忘れません。勿論、我々は全く事件との関係は無く、押収された住所録や書類は一年後に返却されましたが、大々的に世間を騒がせた「ガダニーニ事件」に巻き込まれそ

うになるという波乱の幕開けとなりました。

会社を始めすぐの招聘は、ロンドン公演の直後亡命し、世界的なニュースとなったソ連の伝説的なバレエダンサー、ルドルフ・ヌレエフでした。亡命したアーティストを招聘することでソ連との窓口であるゴスコンサートとの関係が壊れてしまわぬよう、公演の企画には細心の注意を払いました。

リヒテルが来日条件

リヒテルとは来日の都度ご一緒に、譜めくりなどもしました。新芸倒産後、新しい招聘元となった事務所社長から、リヒテルからの来日の条件として「新芸時代のメンバー、通訳の河島さん、調律の瀬川さん、そして寺田の3人と一緒にツアーが出来るなら」と云う要望があるので、是非同行を引き受けて欲しいとの話がありました。

私は丁度、TVドキュメンタリーでブレイク中のチョー・リヤン・リンとN響のコンサートの企画で多忙を極めていた時期でしたが、他でもないリヒテルの希望に、万障繰り合わせ、その依頼を引き受けました。先日、NHKでもリヒテルの特集で、鎌倉の旅館、海浜荘で2週間滞在していました、ということが放送されていましたが、とても懐かしく思いました。

その後も我が社はリヒテル自身から来日の度に幾つかの主催公演を任せられ、当時既に弊社に加わっていた中根さんと共に長野に車を走らせ、丸一日で公演の準備をしたことありました。

また、今では伝説となっている大原美術館「美術館コンサート」等の企画マネジメントも致しました。数々の名画の前でリヒテルの演奏が聴けるという事で話題となり、このスタイルの演奏会の日本での走りとなりました。

ブーニン亡命にかけつける

1984年渡米した際、ICMラモント社長から、ヴァイオリニで素晴らしい子がいるので聴いて欲しいと頼まれ、ドロシー・ディレイの教室に行きますと、そこにいたのは眼鏡をかけた小さな女の子、当時、既に12歳とは思えぬ演奏で、すぐその場で日本でのマネジメントをすることに決めました。それがみどりちゃん(五嶋みどり)でした。

また、1988年に、ドイツ演奏旅行中ハンブルクへと逃亡し、亡命したブーニン。旧知の友人を通じ亡命したいとの相談を受けていた私は、身の安全の確保や当座の資金提供の為、すぐハンブルクに飛びました。ブーニンの亡命後の更なる活躍は皆様ご存じの通りです。

設立から35年、出会いもエピソードもここではお話ししきれないほど沢山ありますが、会社が今日まで存続し仕事が続けられているのは本当に皆さんのお陰で有り難い事と思っています。
(一部敬称略)

2017年5月24日 音楽プロデューサー協会例会にて
記録：丸田朗



私の仕事の経歴

経験こそ財産 ～マネージメントで60年～

ミリオンコンサート協会 高原加代子



台北の高原楽器店

生まれたのは、台湾、台北です。7人兄弟のちょうど真ん中、4番目です。当時は兄弟が多い家庭が多かったので、7人兄弟も珍しくは無かったです。実家は台北で「高原楽器店」という楽器店をやっておりました。楽器店ですが、テニスのラケットを販売したり、ラケットのガットを張ったりしていました。今から考えれば楽器の材料と同じだからでしょうかね。レコードもたくさん売っていて、そのレコードのジャケットを見ていたので、いろんな海外の演奏家の名前をそこで知ったり覚えたりしていました。1階が楽器店で、2階では叔父が音楽教室をやっていました。叔父はハーモニカ奏者で、当時のチャンピオンだったと記憶しています。当時の音楽教室は皆ハーモニカでしたので、叔父がハーモニカをメインに教えていました。実家(お店)の向かい側には公会堂があって、演奏会も行われました。何度か聴きに行ったように思います。ほとんど覚えていません。とはいっても、子供の頃から周りに音楽が自然にある環境だったので、音楽があることが当たり前だと思っていました。今から考えれば、当時としては珍しかったのだと思います。日本に来たのは中学生くらいの時です。戦争の影響で台湾にはいられなくなり家族で逗子に住み始めました。それ以来今でもずっと逗子に住んでいます。



ヤマハホールから出発

音楽を仕事とし始めたのは二十歳くらいの頃です。新しくヤマハが銀座にホールとお店を作る、ということで[注：現在のヤマハホールの以前にあった旧ヤマハ銀座ビル。1951年完成]、人材を探していたのです。ヤマハの当時(日本楽器製造)の社長川上源一さんの家の隣に、たまたま私

の小学生からの友人が住んでいて、誰か音楽がわかる人を探している、という事で友人に誘われて、ヤマハホールに勤め始めました。

ヤマハホールでは、ホールで行うコンサートのチケットを置いてもらう為に、銀座のデパートやお店等、銀座中を営業して回っていましたので、お店の人達のほとんどと顔見知りになってきました。チケットを売る仕事は楽しくて好きでしたね。そのうち巷では、「銀座の顔みたいだ」なんて言われました。ある時、お休みの日に妹が「銀座で買い物をしたい」というので銀座のお店を良く知っていた私は案内をしたのですが、会う人会う人が皆、私に挨拶するものだから、妹は「いったいどんな仕事をしているの? やくざの仕事でもしてなければこんな高級なお店で顔見知りになる程買い物なんてできないよね? !」なんて言われた事もありました。買い物した事なんてほとんど無かったんですけど(笑)。そんな事でしたので、音楽業界の人達ともだんだん顔見知りになってきました。小尾さんと知り合ったのもその頃です。

その頃、ヤマハホールでは演奏会はそんなに多くはなく、ラジオ文化放送の公開収録ばかりやっていました。当時はテレビもそんなになく、人々は皆ラジオを聞いていましたので、公開収録とともに多くのお客さんも大変多く来るので、ヤマハホールから今の「銀座ライオン」がある所くらいまで人が並んだりして、音楽なんか知らないでもできるお客様を並ばせる人員整理なんかもしていました。美人だったらレコードの売り子もできたんでしょうけど、私はバスだったから、人員整理に回されたんでしょうね(笑)。周りのお店にも迷惑をかけるし、お客様からも何か言われたりするので、その人員整理ばかりやるのが嫌になってヤマハホールは辞めてしまいました。

ミリオンコンサート立ち上げ

そんなところで、ちょうどできたばかりの新芸術家協会で働いていた小尾さんに誘われて、新芸術家協会のお手伝いをするようになりました。始めはお手伝い(アルバイト)として入りましたので、給料はちゃんともらえていたと思いますが、社員となって少ししたら、もうもらえなくなってしまい、1年後には会社がつぶれてしまいましたので、小尾さんと一緒にミリオンコンサート協会を立ち上げました。



客の名前と座席番号を記憶

ミリオンコンサート協会を立ち上げたのと同じ頃、ちょうど日本フィルも出来上がったので、日本フィルを使っての興行を始めたのをきっかけに、日本フィルのマネジメントを手掛けることになりました。日本フィルの会員組織を作って、会費の請求やチケットの申込みの一切を私が行うようになりましたので、そのうち会員の名前と座席番号を覚えてしまい、本番当日チケットを忘れたお客様がいると、名前を聞いて何階席だったか、さえ聞けば、「あ～、あなたは何列の何番よ、そこに座って」なんて教えることができるようになりました。名前を聞いてその名前を紙に書くと、すらすらと番号が出てくるんです。頭で覚えていたというより、右手が覚えているんです。当時今のようなプレイガイドも無かったですから、私がほとんど全部チケットの申込みを電話で受けていたんですね。また、ダイレクトメールも当時は全部手書きですから、会員の名前も何度も書くんです。ですから会員の情報は右手がほとんど覚えていました。顔はわからないんですけど。ですからお客様からも「よく覚えますね！」なんて喜ばれました。そんな風にお客様を捕まえておくのが得意だったんですね。会員が継続の年会費を払い忘れたりすると、すぐに私が「入っていないわよ。今度来た時に払ってね」なんて電話していました。中には会員の継続をやめようか、なんて思っていた人もいるかもしれませんが、「あなたの事を気にかけていますよ」という感じで電話すると、皆快く払ってくれました。

小澤征爾の母から愚痴

日本フィルのマネジメントを行っていた関係で、新日本フィルができた時にもしばらくは同じようにマネジメントしていました。またそのおかげでいろいろな指揮者やソリストとも知り合う事ができました。

小澤征爾さんもその一人です。小澤さんは日本フィルでデビューした頃はミリオンの所属で私が担当していました。小澤さんの1度目の結婚式の時には、小澤さんから頼まれて、披露宴の受付も手伝いました。披露宴が始まっても私は受付にいたのですが、私の後ろがすぐにご挨拶を行う場所になっていたので、ご挨拶の声がよく聞こえてきました。その中でどなたか、披露宴なのに挨拶で新郎に対して怒鳴った方がいましたね。何か披露宴が気に入らなかっただんでしょうね。新婦のお父様なのか関係者なのか、どなたかわかりませんが相当怒っていました。また小澤さんのお母様から私は大変気に入っています。よく電話で2、3時間もお話をしました。まだ若かった小澤さんがオケで何かあると、自宅で愚痴るようなんですね。それを聞いたお母様がどうにかならないか、と私も電話してくるんです。しかも帰宅してから、夜分、私の自宅にです。だからと言ってどうなるものでもないんですけどね。話の内容は私は誰にも

言いませんでしたから、私とお母様しか知らないです。それも十年以上続きましたね。

團、黛、芥川、直純までも

電話と言えば、昔「三人の会」というのを團伊玖磨、芥川也寸志、黛敏郎が結成したのですが、その三人からもよく、「つかいっぱ」のように物事を頼まれました。三人とも始終私の自宅に電話をしてきて、「これを届けて！」だの「あれを持ってこい！」だのその度に私は呼ばれて出かけて行きました。ミリオンの業務とは直接関係ない事もありましたし、交通費が掛かるのにお金ももらえる訳では無かったのですけれど、なにか頼まれると断れないんですよね。その電話のせいで、当時の電話代は月に3万も4万もしたことありました。母は私が「何か悪い事をやっているからいろんな電話が掛かってくる」なんて思っていて、私がいない時には自宅の電話を座布団に乗せて、その上から布団でぐるぐる巻きにして、電話の音が聞こえないようにしていました。

そういえば山本直純さんもよく自宅に電話をしてきましたね。直純さんの事は、私は担当していなかったので昼間は会社で岩永や小尾さんが対応するのですが、夜になると私の自宅に電話てきて仕事を頼まれました。直純さんには「高原は俺と性格が似ているよな。だから話が通じていい。」なんて言われていました。そんな風に言われて物事を頼まれるとやはり断れずに、いろいろやってあげていましたね。でも直純さんは気を遣ってくれる、本当にいい人でした。奥さんは怖くて、しそっちゅう怒っていましたが。

そんなことでいろいろな方に使われましたが、いろんな所で顔が広くになりましたし、偉い先生の家を知ったり、大船の撮影所で映画の収録を見る事ができるなど楽しい事もあり、そのおかげで次の仕事にも繋がりました。大変でしたが、あれが無かったら途中で辞めていたかもしれません。

心の中で生きているダーク

それと忘れてはならない、ミリオンコンサートにとって本当に大きく寄与してくれて、私が担当した中で一番の売れっ子だったのはダークダックスです。それこそヤマハホールで行われていた文化放送の公開放送にたまたま出演していたのを、当時はもうヤマハホールにはいなかったのですが、昔から今もいるような顔をして「勝手知ったる」で勝手に入って見に行ったんです。歌はうまいとは思わなかったですし大した事はない、と思ったんですが、放送を聞いていた聴衆からの反響が大変大きかったので誘いました。慶應大学のワグネル合唱団に所属していて、収録後は「今日は大学に戻る」というので、急いで日比谷公演の中を走って行って事務所に戻って、同じ慶應出身だった小尾



さんに「今から慶応に帰る、と言ってるから慶応に行って誘って！」と言って、慶應大学に行ってその場で契約してしまいました。すぐに日比谷公会堂で公演を催したのですが、一回目の公演から日比谷公会堂 3000 人が満員。今は日比谷公会堂は約 2000 席しかありませんが、当時は 3000 席ありました。かけそばが 1 杯 10 円の時代で S 席が 500 円ですから、まあまあいい値段だったと思います。

以後 53 年間公演を続ける事ができました。今ではもう 3 人亡くなってしまって一人になってしまったのですが、いまだにファンの方から、ダーク宛の年賀状や、「庭のみかんがなったのでどうぞ」なんてプレゼントが送られてたりします。ファンの心の中では未だに全員生きているんですね。すごい事だと思います。

慶応の次は早稲田

ダーク以外にも多くの演奏家は私が見つけてきました。特に歌が好きだったので、よく歌の公演を聴きに行っていましたが、岡村喬生さんは早稲田大学のグリークラブで歌っていた時に、声が大きくてとてもいい声だったのを私が見つけてマネジメントを始めました。マネジメントを始めてからは、早稲田出身の岡村さんには慶応出身のダークの事を「あんなやつら早く辞めさせろ」なんて言われましたが、ダークからは「あんな下手な歌手早く辞めさせて」なんて言われてました。どちらも大してうまくないんですけどね(笑)、魅力はありましたのですずっと続けていました。

出場者の採点がきっかけ

ハンガリーのコンクールを取ったコバケン(小林研一郎)も始めはミリオンコンサートでした。藤井一興さんは、コンクールを聴きに行って、たまたま座った席が審査員の真後ろの席で、ちょうど審査している点数が見えたんですね。私も同じように出場者の点数を付けてみようと思い付けた所、藤井が一番だったんです。それで私が付けた点数が前にいた審査員とまったく同じだったんですね。それで「これは！」と思いマネジメントを始めました。実際には 3 位だったので、「なんで？」と聞いたら、「演奏中に大きなミスをしたので、そのせいだ」と言われました。少しくらいミスをしたって、良いものは良いと思うんですけどね。

そんなこんなで、60 年以上、音楽を仕事として働く事ができました。私は本当にいろんな方々と一緒に仕事をしましたし、いろんな方と顔見知りになることができました。

大御所の方から使われて大変だったり、苦労した事もありましたが、その経験が今、大変貴重な財産となっています。そのおかげで今があるんだと思っています。



私の仕事の経歴

人との出会いが仕事広げる クラシックの世界に居続けたい

(株)いちべる 橋本伸一郎



私はずっとクラシック業界の真ん中で働いてきた訳ではないので、「私の話なんかで良いのかなあ」と思いつつとにかく自分が今までどんなことをやってきたかをお話ししてみようと思います。

私が今まで関わってきた会社は、細かいのを省いても6社あります。「転石苔をむさず」とは言いますけど、まさにそんな気がします。しかし、音楽と音からは離れまいと心がけ様々な仕事をしたおかげでいろんな経験ができました。今となっては「良かったな」と思うこともあります。

日本舞踊から梶本へ

私の母は日本舞踊花柳流の師匠で、小さい頃から邦楽と踊りに親しんでいました。他では得られない環境で生まれたと思い、踊りの稽古を始めましたが、傍ら父が好きだったクラシック音楽にも触れ、いつしかそちらが心の中では大きくなり、大学時代にオーケストラにハマリチエロを始めました。大学は法政です。卒業後の就職先は音楽界のどこかへ、と思い、N響、都響の事務局など、候補はいくつか挙がったのですが、ちょうど第1次オイルショック(1973年～)がやってきてしまい、その影響で就職先を探すのが本当に大変になってしまいました。それで困っていた時、母の踊り関係の方の紹介で菊池音楽事務所の菊地維城さんと出会い、梶本音楽事務所を紹介して頂きました。そのおかげで1975年、梶本に拾われました。実はこの時、大学を自主留年すると決めた後でした。つまり、梶本に勤めながら月に一度は大学に最後の1科目取得のため通学もしていました。

ところが大学も卒業が近づいていた頃、藪田さんに「お前はマネージャーには向かへんわ。」と言われてしまいました。実際にやってみると、自分でも「向かないのかも」なんて思い、東芝EMIのプロデューサーでもあった菊地さんに再び相談に乗って頂いた時「音楽系の技術屋さんならいいんじゃないいか！」というアドバイスを頂き、大学を卒業後、専門学校の千代田学園に入って、音響、録音、放送の勉強をすることにしました。

一方、梶本音楽事務所からは、退社した後に、元々担当していた木琴の平岡養一さん(木琴奏者)が1977年に音楽生活50周年を迎え、民音さんが「音楽生活50周年記念、全国100回コンサート」というのを企画、その随行マネージャーを依頼され、一緒に全国を回ることとなりました。今から思えば、「マネージャー」というよりは「ボーヤ兼付

き人」の様な仕事だったかもしれません。その時初めてPAと照明のプロの仕事に触れました。まだ学生の身分ではあったのですが、千代田学園には「就職活動」ということにして公演をとって、30公演以上、全国を廻ることができました。

アオイスタジオでAV

千代田学園では、主に音響(レコーディングやPA)を学びました。いま行っているマネジメントや企画制作とは少し違った内容ですが、当時勉強した音響の事は、コンサートでどの位置に演奏者を立たせたら一番良い音で響くか、という事をアドバイスするうえで大役に立っていますね。

千代田学園を卒業した後、アオイスタジオに就職しました。当時、アオイスタジオは日本最大級の「映像に音をつける」事ができるスタジオ会社でした。昔は映画でもテレビでも、生演奏で映像に音をつけていました。配属先はAV(オーディオビジュアル)事業部で、当時派手になってきた結婚式の映像、音響、照明を一括でできるコントローラーとソフト(披露宴専用音楽、演出スライド)を開発していました。その実践のため、京王プラザ、ニューオータニ、霞ヶ関の東京会館で披露宴の演出をやらされたりしました。私の入社前から存在した音楽ソフトはあまりクオリティーの高いものとは思えませんでした。そんな時、新しいソフトを作る話が持ち上がりました。元々録音制作が出来ればと思って入社した会社です。アオイスタジオといつても技術会社で、音楽の制作と言えばグループに平尾昌晃さんの歌謡教室があるくらいで、クラシック、邦楽に通じる人は誰もいませんでした。結婚式というのは和装もあり、洋装もあり、多くのソフトはその折衷で作られていて中途半端だったんです。和なら和、洋なら洋と、それぞれの個性が出来るように作曲家やアレンジャーに頼んでオリジナルの作曲やアレンジをしてもらいました(邦楽器だけのオリジナル曲は牧野由多可先生。クラシック系、ポップス系は南安雄先生)。オケ(既存のオーケストラではなく、スタジオミュージシャンですが、クラシックはたいがいN響か読響のメンバー)を雇って録音に立ち会って、ミキサーの手伝いなんかもしました。当時はデジタルではなく、アナログで16チャンネルの時代です(のちに24チャンネルになりました)。4チャンネルにトラックダウンの方法を考えたりすることで、マルチテープレコーディングの知識を得ることができました。



アオイスタジオでの生活は時間的には今で言うブラック企業的でしたが、音の世界でそれはそれなりに居心地のいいものでした。しかし、どこかに「クラシックの世界に戻りたい」という気持ちが残っていました。そんな頃「レコード藝術」を読んでいましたら、カメラータトウキヨウの広告に目が留まりました。その広告には毎回社長の井坂紘さんのコラムが載っていて、その内容が大変面白く興味を惹かれました。そしてある時の広告に社員募集があり、思い切って受けたんです。募集はレコード部門で、その時は採用されなかったのですが、数ヶ月後に「マネジメントで」と誘われて、結構面白いことをさせてもらっていたアオイスタジオを意を決して辞め、カメラータトウキヨウに勤めることにしました。

カメラータでマネジメント

初出勤の日、定時の10時に事務所に行ったらまだ鍵が閉まっていた誰も出社していません。「これは早かったかな」と思ってしまいました。また、井坂さんのやり方は独自のやり方で、榎本音楽事務所での経験からみて最初は疑問を感じることも多かったんですが、自分なりに覚えていきなんとか続けて行くことができました。

カメラータは元ピクター音楽産業のプロデューサー井坂紘氏が独立して設立した、アーティストマネジメントも兼ねる新しいレコード会社です。入社当時は先輩として平井洋さんがマネジメント部門におられましたが、程なく退社され事実上マネジメント部門は私一人になりました。日本人アーティストはヴァイオリン界の重鎮で群馬交響楽団の音楽監督の豊田耕児先生、箏の沢井忠夫さん、招聘アーティストとしてウィーン弦楽四重奏団やカール・ライスターなどがいました。

また、群馬交響楽団のお手伝いもしていました。ヴァイオリンの豊田耕児さんが音楽監督で、井坂さんが監督補だったかな。とにかく当時経営面でも大変だった群響を立て直すために、群響のレコーディング、レコードのリリースを精力的にやっていました。群響の東京公演のマネジメントもしていましたが「地方オケが東京でやる必要があるのか」みたいな新聞批評を評論家に言われたりして悔しかったのを覚えています。群響は大変な時代でした。カメラータもそれなりに群響の為に頑張っていたとは思います。

井坂さんはプロデューサーとして、草津夏期国際音楽アカデミー＆フェスティバル、つくば国際音楽祭、民音の「室内楽シリーズ」の企画や、引退したシュワルツコップの公開講座を展開したりしていました。シュワルツコップの公開講座では、練馬文化センターで昼夜2回公演したのですが、昼公演を終えた後、女史がホテルで休憩がしたいと言いましたらしく、井坂さんが京王プラザに戻ってしまい、夜公演になかなか戻ってこず、2時間も待たせたお客様を引き留めるのに思わず苦労をさせられました。井坂さんらしいです。

決してセンセーショナルな事や儲かることなどありま

せんでしたが、他とは違う音楽的に評価される特別感のあるマネジメントの経験が出来ました。

また、シュワルツコップやビクトリア・デ・ロサンヘルスもそうですけど、音楽的なものは別として人間としてオーラがあるじゃないですか。そういう方々に間近に出会えたのはカメラータにいた時の一番の良い体験でした。いずれにしても、いろんな人の出会いが私にとって勉強になっています。井坂さんは時間の管理とか事務的な仕事とか苦手なことあるんですけど、ライナーノーツなど文章を書けば素晴らしいし、何より情熱がありました。ですから井坂さんから学ぶことも多かったです。ただ、やはり破天荒な井坂さんのカメラータでは私の様な凡人には仕事を続けることが難しい事も次第に多くなっていました。

母校に戻る

そんな頃、以前通っていた千代田学園の先生から連絡があり、学生の増加に伴い専任講師が足りないので来ないか、という誘いを受け、最初はためらいもありましたが、千代田学園に務めることになりました。これまでの経験も生かせるな、と思ったのです。

千代田学園では芸術専門課程というのがあって、その中の音響芸術科の専任講師になったのですが、アオイスタジオをやめて5年も経たない内にスタジオ録音の技術は進み、コンピュータによるミキシングのオートメーション化の時代となり、再度勉強し直さなければなりませんでした。レコーディングの仕方も、外部講師のアシスタントをしながら勉強し直しました。2年目からは実習クラスを持ち、さらに2年次生にはゼミを作らなければならず、過去の音響の経験で言えば、アオイスタジオ時代のイベントの音響映像オペレーション、カメラータでのレコーディングの立ち合いを通して見知った「スタジオを使わない音響＝PA並びにホール録音」をやるゼミを立ち上げました。

1年生には音の性質とレコーディングの基礎、ケーブルの巻き方とかマイクロフォンの名前を覚えさせるところから始め、録音実習では読響メンバーの木管五重奏とか弦楽四重奏のステレオ録音の基礎(2チャンネルダイレクト録音)を行い、その後ロックバンドを使って24チャンネルマルチ録音からトラックダウン、そして1年の最後はラジオドラマを作らせました。

ミュージカル制作から指導まで

学校にはミュージカル科があったのですが、その専任教師が舞台のことを知らないんです。理屈は教えられるのでしょうけど、実践で築かれたものはないのです。そのころ年度末に毎年、今は無くなってしまった新宿コマの地下にある“シアターアップ”で卒業公演と称してミュージカル公演を開催していました、音響の学生も一部有志で関わっていたところ、私のゼミが本格的に関わることになり、運営上いろいろ問題があったので、「ミュージカルをきちんとやりましょう！」と提案したら、音響だけでなく制作指



導から演奏指導までやらなければならなくなってしまい、大変な思いをしたこともありました。演奏指導というのはミュージカルの伴奏も演奏を授業としてやっている学生達を使うため、日頃はポップロックや吹奏楽などしかやっていない学生に、ミュージカルの伴奏をやらせる、しかも指揮者も学生でしたのでその指導もしなければなりませんでした。楽譜を扱える専任も私しかおらず、元々演奏指導に当たっていた河辺浩市先生(トロンボーン)、三井章夫先生(トランペット)など戦後のジャズ界を作ってきた大先生方も指導をお手伝い頂き仕上げていきました。因みに音楽監督は、ミュージカル俳優島田歌穂さんのご尊父、島田敬穂さんでした。

ミュージカルは多額の費用が掛かるのですが、教育的には最も実践に近いもので、何とか学校に一学科の公演ではなく学校の広報活動の一環として「生徒を集めるために(質の高い)ミュージカル公演をやらなきゃいけない!」と言ってお金を出してもらい、例えば放送芸術科の学生に中継録画をやらせたり、宣伝クリエイティブ科にチラシ、ポスター、プログラムなど作らせたりして、芸術専門課程全体で開催しました。今でも時々、その頃の生徒が様々な現場で活躍しているのを見ると大変うれしくなりますね。ホールでたまに卒業生の舞台スタッフに、「先生!」なんて声を掛けられることがあります、それはちょっと恥ずかしいのですが。

世間ではコンサートイベント(もちろんポップスの世界ですが)盛り上がりを見せ、入学希望者にも「コンサートを作る仕事がしたい」なんて言う子が増えています。そうするとそのための科が出来て、舞台制作の授業も担当しました。しかし、バブルがはじけて少子化も相まって生徒が減ってしまい、最終的には学校が潰れてしまいました。私はなんか学校が潰れる前に次の仕事を見つける事ができました。

つぶれる前に退職

次の仕事は、マネージャー業の知人から「S T ジャパン」(辻孝文社長)という会社を紹介されました。その会社の基軸は世界中のオーケストラの名手を集めて編成された「スーパーワールドオーケストラ= SWO」と某生命保険会社が当時で17年続けていた「全国縦断チャリティコンサート」の企画立案、実施でした。

しかし、S W Oの企画はすばらしいものの、チケット販売については仕掛けばかりでなかなか世間に反響を呼び起こせず、もちろん多額の経費がかかる事業のため、そのオーケストラ奏者への出演料の支払いが滞るなどの問題が毎回発生しました。海外から来た奏者達も、「本当にコンサートできるのか?」なんて聞かれるような状況になっていました。

メータを呼ぶわ、マゼールは呼ぶわ、時にはフィリップ・アントルモンが振ったり。私の時の最大のイベントは日韓共催のサッカーワールドカップの時の「3大テノール」と S W Oとの共演でした。他にもフジコ・ヘミングさんのコンサートを仕掛けたり、パヴァロッティの世界ツアーの日本公演にも手をのばしました。集客力はありますがあお金のか

かるような企画ばかりですからねえ…。結局 S T ジャパンが立ち行かなくなり、私もいられなくなりました。

自分で会社を立ち上げ

ただ、保険会社の「チャリティコンサート」は代理店から、やめた私に引き継いでもらいたいとの申し出を受けました。

その後、藪田さんからご紹介を受けて、ヴァイオリン製作の中澤宗幸さんがオーナーをやっているアルテ工房(現日本ヴァイオリン)に行くことになりました。基本的には中澤さんの奥様のヴァイオリニスト中澤きみ子さんのマネジメントがメインの仕事で、公演の制作やマネジメントができる人を探している、ということでした。

ただ、保険会社の仕事がやりにくくなりその後独立して、自分で会社を立ち上げました。それが今の「株式会社いちべる」です。「チャリティコンサート」をメインにしてとりあえずやっていけるかな、と思っていました。それでも浜離宮朝日ホールで3年ぐらい、ランチタイムコンサートの舞台監督の依頼を請けるなど、日銭を稼ぐような事もしました。ただ、出演される多種多彩なアーティストを通じて、様々な経験とそのアーティストの所属する事務所の方々との出会いと情報の交換など貴重な勉強になりました。

最近では、ローマ歌劇場の招聘の仕事を手伝って(招聘元がなんとモーニング娘をプロデュースする大手プロダクションのアップフロントプロデュースグループ)、びわ湖、東京などのツアーを周りました。その時、指揮者吉田裕史氏と知り合って、しばらくしてから電話で、「市川市文化会館でオペラをやるから」ということでオーケストラの仕切りを頼まれ、さらに、その吉田さんは現在ボローニャ歌劇場首席客演指揮者ですが、日本で大きなスポンサーの意向を受けてここ数年、日本の各地のお城を背景にした野外オペラ公演を開催していました、そのオーケストラ(ボローニャ・フィル)周りのマネジメントを手伝わせて頂きました。

青島広志さんの仕事も年に何本かやっています。青島さんの忙しさと細かな仕事の量は到底マネージメントベースでできるものではありません。私はその一部の営業窓口としてお仕事をさせて頂いております。

長々と履歴を恥かしながらお話しさせて頂きましたが、一つの仕事をコツコツとできなかった分、様々なシーンで様々な方々と出会い、今も昔からの人との繋がり、そして新しく出会った人との繋がりで仕事が広がっています。人の出会いがいろいろな経験にも繋がりました。もう年金をもらってもいい歳なのですが、プロ協には私より年上の方がたくさん現役で活動されていますし、子供はまだ成人していないので、まだまだ頑張らないといけませんね。



やっぱりクラシックはいいな！



中根俊士

先日あるジャズ楽団の演奏を聴きに行きました。この団体は面白く気にかけていましたが、やはり私にはジャズは似合わないということがわかりました。似合わないというよりも、好きになれないということなのでしょうか。私が考へている音楽とは、美しい音で表現するというのが最低条件だと思っております。ジャズは大きな音というのが最低限必要なのでしょうか。PAを入れその上大きな音で演奏し、ピアノなどはまるで打楽器かと思うほどに叩きつけています。

クラシックでも、叩けば大きな音が出ると思っている演奏家がいますが、そうでなくどう響かせるかということが重要だと思います。

どんなにうまいクラシック奏者でも、音が汚い人は好きになれません。

最近の演奏家はテクニックはあるが、音に対しての細かい神経を持っている人が少ない気がします。

やはり若いときから上質の音楽を聴いていないことが大きいのかもしれません。

この秋はリートの演奏会を何回か行いました。秋の夜長にシーベルトの歌曲を聴いていると、あまりの美しさについ酒が進んでしまいます。

特に、シーベルトの「夜と夢」という曲が気に入っています。非常にゆっくりと静かな想いが美しい旋律で流れ、初めから終わりまで、弱音で歌われるのですが、声のコントロールはとても難しいと思います。

悲しさを感じさせる曲なので、いなくなった人を思い出してしまい、ときには涙ぐんでしまいます。歌曲とはそういった人の感情を現してくれるものだと思い、「やっぱりクラシックはいいな！」と感じる瞬間です。

2018年1月 音楽プロデューサー協会発行 編集：志村嘉一郎 デザイン：梅津知美

音楽プロデューサー協会会員

在原 勝 (株)東京プロムジカ 代表取締役
上野喜浩 すみだトリフォニーホール プロデューサー
内田一成 (株)フューチャーデザイン 代表取締役
梅津知美 (公財)多摩市文化振興財団 音楽プロデューサー
江藤昌子 こぶしくらぶ主宰 プロデューサー
兼岩好江 オフィス アルシュ 代表
博松大剛 ロングランプランニング(株)
(カンフェティ) 代表取締役
黒川浩明 (有)大阪アーティスト協会 会長
向後由美 関西音楽人クラブ 代表世話人
小林信一 せきれい社「サラサーテ」編集部
斎藤 茂 OTTAVA(株) 取締役 ゼネラルマネージャー
佐々木仔利子(特)日本室内楽アカデミー 理事長
志村嘉一郎 ジャーナリスト、元浜離宮朝日ホール支配人
白神克敏 (株)ヴォイシング 代表取締役
高原加代子 (株)ミリオンコンサート協会
寺田有佑 (株)日本アーティスト 取締役会長
中根俊士 (株)東京アーティスツ 代表取締役
中村由美子 リモージュコンサート(株) 代表取締役
萩生哲郎 ナクソス・ジャパン(株) デジタル事業部
橋本伸一郎 (株)いちべる 代表取締役
原 浩之 Hakuju Hall(株) 白寿生科学研究所 支配人
平井 満 横浜楽友会／鶴沼室内楽愛好会 代表
松崎三恵子 (株)シド音楽企画 代表取締役
松本京子 (有)おふいすべガ 取締役
丸田 朗 (有)マルタミュージックサービス 代表取締役

村上雄一 (株)ユーラシック 代表取締役
村田 亨 (株)テレビマンユニオン エグゼクティヴプロデューサー
藪田益資 クラシック・ニュース プロデューサー
吉井實行 (公財)オーケストラ連盟 専務理事

代表幹事 村上雄一
幹事 梅津知美 博松大剛 中根俊士
中村由美子 橋本伸一郎
監査 平井満
参与 藪田益資
事務局長 丸田 朗

音楽プロデューサー協会
273-0037 千葉県船橋市古作3-1-15-308
Tel. 047-335-2002 Fax. 047-335-2062
(有)マルタミュージックサービス内

2017年12月現在

会報タイトル変更について

会報誌のタイトルを今回より変更いたしました。葉（しおり）は読書の際には大変便利な道具ですが、辞書を紐解くと、ふたつの「干」で「揃えられた様子」をあらわし、削られた「木」の一字を加えて「みちしるべ」という意味が与えられたようです。

音楽をプロデュースする、という世界でも、さまざまな分野で活躍した先達が遺した偉業や現在進行中のもの等々、後世に伝えてゆくべき案内や情報があります。音楽プロデューサー協会の例会で、勉強会などの情報を元にまとめた小紙のなかでたった1行でも、皆さんにとっての「みちしるべ」となればと願い、名付けました。タイトルの変更はいたしましたが、通算ナンバーは前号より引き継いでおります。